



薬師如来像

源宗寺本堂保存修理事業 寄附募集趣意書

熊谷市指定
有形文化財

平戸の 大仏

【木彫大仏坐像】 薬師如來像 觀世音菩薩像

こうした事態に対応すべく当寺護持会、地元平戸地区、事業賛同者、熊谷市教育委員会を中心とした保存修理委員会を結成しました。令和元年度の保存修理事業の実施に向けて様々な検討を進めておりますが、改修工事には総工費約5千万円を想定とした多額の費用負担が見込まれ、所有護持会なりの負担のみでは到底実現し得ない状況であります。

熊谷の文化遺産を未来に継承するための本事業は、現代の今に生きる我々の責務なのではないかと考えております。本事業に際しまして、皆様のご賛同を頂戴するとともに、工事費用のための寄附募集を行います。是非とも皆様のご協力をお願い申し上げます。

熊谷市平戸の源宗寺は17世紀初頭に華井雅季・助が開基し、本堂内には薬師如来と觀音菩薩の二体の「木彫大仏坐像」が鎮座しています。二体の仏像は台座を含めると約4メートルの規模で、木彫仏として日本最大級を誇り、「平戸の大ほとけ」と呼ばれています。二体の仏像が安置される本堂は、古都奈良の東大寺大仏殿に模した形狀とも伝わり、仏像の制作と同時代に建立された物と推定されます。

江戸時代半ばに洪水被害を受けた後、建物の丈を下げる改修や壁の補強などをして、現代に難逃してきた源宗寺本堂ですが、建造物の全体における老朽化が進み、今後、仏像の保存にも支障が生じることが懸念されています。

源宗寺本堂と「木彫大仏坐像(平戸の大仏)」の概要

■熊谷市指定有形文化財(彫刻)「木彫大仏坐像」(平戸の大仏)の概要

熊谷市平戸に所在する源宗寺(熊谷市平戸642)は鴻巣の勝願寺末寺である。藤井家に残される源宗寺過去帳によると、開基は祖先の藤井雅楽之助が行い、源宗大法師によって開山が成されたことが伝わる。

本堂には熊谷市指定有形文化財(彫刻)「木彫大仏坐像」二体が安置されている。大仏の背丈(高さ)は約3.5mあり、木造寄木造のものとしては規模も大きく、埼玉県内最大規模で、全国的にも希少なものと言える。平戸の地名を冠して「平戸の大仏(おおほだけ)」と称されている。

内陣の蓮華座上に祀られる仏像は、正面右側が薬師如来坐像、左側が觀音菩薩坐像となる。薬師如来では禪定印に持つ薬壺が無く、また、觀音菩薩では左手に持つ蓮華が失われているが、全体的な造形美が維持されている。昭和30年頃に確認された堂内棟札によると、仏像制作に関しては仏師である順譽宗円と江戸弥兵衛が担い、漆塗り・金箔押しを塗師である中西村の弥兵衛と沼黒村の太兵衛が担当したとされる。

源宗寺は官や当時の権力者による支援を受けずに建立を果たした私寺であり、江戸時代に「平戸の大仏」として近村の人々から大いなる信仰を受けた。特に二体の胎内に藏されていたとされる秘伝書が神經痛の妙薬として知れ渡り、昭和40年頃までこれを求める人々が絶えなかったといわれている。また、目の妙薬を販売していたとの伝承も残る。

■源宗寺本堂と保存の歴史

現本堂が建つこの位置には、茅葺屋根の建物が元來存在していたと推定され、それを前身本堂として寛文2年(1662)に勝願寺の第一四世玄誉上人による一万日念佛供養が成された。その勤行の折、本尊となる薬師如来像と觀音菩薩像の制作も担われている。

源宗寺中興の祖となる第五世含譽上人は、元禄10年(1697)までに境内の御堂の建立を成し、また、元禄14年(1701)には本尊となる大仏の再興が図られており、翌年春に大供養が営まれた。これら大仏が元禄期における新たな制作なのか、あるいは寛文期制作のものの修理であったかは、現段階では不明である。

正徳3年(1713)に何らかの理由で大仏は損傷し、近隣村々の援助を受けて修復が成されたが、寛保2年(1742)8月の大洪水では再び二体の大仏は破損したことが考えられる。その後、第八世喚譽上人が現本堂の再建を行い、大仏の修復にも努めたと伝わる。明治維新後に荒廃した経緯もあるが、地元住民及び檀家各位の尽力にて仏像及び本堂の保存維持が現在まで進められている。

熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹



●ナビで検索する場合
「老人憩の家 平戸荘」埼玉県熊谷市平戸494-1 TEL.048-524-9607

ご寄付は別紙【寄付金募集要項(寄付金申込書)】をご参照ください。

源宗寺本堂保存修理委員会 事務局 山川宏之(山川会計事務所 内)

T360-0015 埼玉県熊谷市肥塙887-6 TEL:048-526-5874 FAX:048-523-7525